古代の詩から学習する漢詩の授業の可能性
― 漢詩入門教材としての『詩経』「桃夭」の実際 ―

国語科　今　成　智　美

1. はじめに

『高等学校学習指導要領』[1] では、「国語総合」の〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕において、「言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について気付き、伝統的な言語文化への興味・関心を広げること」((1) のアの（ア)) が示されている。また『学習指導要領解説』[2] の中でも、「我が国は中国の文化の受容とその変容とを繰り返しつつ独自の文化を築き上げてきた。その経緯を踏まえ、古文と漢文の両方を学ぶことを通して、両文化の関係に気付くことが大切である。」と具体的に述べられている。このように日本語や日本文学の素地とも言うべき「漢文」は、過去の日本人が長きにわたって享受・発展させてきた伝統的言語文化であり、近年のグローバル化の中で、この自国文化の独自性と価値を理解し継承していく態度を育成することはますます重要であるだろう。

高等学校国語科における漢文教材には、主に詩文、史伝、思想があるが、その中でも漢詩は最も親しみやすく扱いやすい教材の一つである。よって漢詩の学習に関する有効な授業方法の開発は漢文教育の活性化にもつながると考える。以上のことから、本稿では漢文教育の中の特に「漢詩」の授業に焦点を当て、漢詩をより生き生きと捉え理解していくための漢詩の学習とその授業展開の可能性について、実践をもとに考察していきたいと考える。

2. 漢詩教材の現在―「国語総合」教科書における漢詩の掲載状況―

「漢詩」の教材として多くの教科書で採用されているのが「唐詩」である。特に漢詩の入門段階の授業では「唐詩」を扱うことが一般的であり、これまで古代の詩はほとんど扱われてこなかった。「国語総合」の教科書に掲載されている漢詩も、杜甫、李白、王維、白居易などによる盛唐や中唐の詩が中心であり、現在のところ唐代以前の詩の掲載はない。高等学校「国語総合」教科書（平成 28 年度使用）における漢詩の掲載状況について調査した結果をまとめたものが、【表 1】である。また、中学校 2 年次および 3 年次の「国語」教科書にも唐詩は掲載されており、高等学校段階までに唐詩を学習した経験のある生徒がほとんどである。中学校「国語」教科書（平成 28 年度使用）における漢詩の掲載状況についてまとめたものが、【表 2】である。

【表1】 高等学校「国語総合」教科書（平成28年度使用）掲載漢詩一覧

＊数字は教科書番号

No.	作品名	作者名	『精選国語総合』（東京書籍）302	『国語総合 古典編』（東京書籍）304	『高等学校国語総合 古典編』（三省堂）306	『精選国語総合』（三省堂）307	『国語総合』（教育出版）309	『新編 国語総合 言葉の世界へ』（教育出版）310	『国語総合 古典編』（大修館書店）312	『精選 国語総合』（大修館書店）313	『新編国語総合』（大修館書店）314	『国語総合 古典編』（数研出版）316	『高等学校国語総合』（数研出版）317	『高等学校 国語総合』（明治書院）318	『精選 国語総合 古典編』（明治書院）320	『精選 国語総合 古典編』（筑摩書房）322	『国語総合』（筑摩書房）323	『高等学校新訂国語総合古典編』（第一学習社）325	『高等学校 国語総合』（第一学習社）326	『高等学校 標準国語総合』（第一学習社）327	『高等学校 新編国語総合』（第一学習社）328	『探究国語総合 古典編』（桐原書店）330	『国語総合』（桐原書店）331
1	春望	杜甫	○	○	○	○			○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○		
2	絶句	杜甫							○	○						○	○					○	○
3	月夜	杜甫										○	○					○	○				
4	登岳陽楼	杜甫				○																○	○
5	登高	杜甫			○							○	○										
6	旅夜書懐	杜甫					○	○															
7	静夜思	李白		○	○	○			○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
8	早発白帝城	李白					○	○				○	○									○	○
9	黄鶴楼送孟浩然之広陵	李白	○			○												○	○				
10	送友人	李白														○	○					○	○
11	春夜洛城聞笛	李白							○	○													
12	望廬山瀑布	李白	○	○																			
13	山中与幽人対酌	李白									○												
14	送元二使安西	王維	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
15	竹里館	王維	○																				
16	春暁	孟浩然	○	○	○	○		○						○	○	○	○			○	○		
17	臨洞庭	孟浩然			○																		

【表 1】 高等学校「国語総合」教科書（平成 28 年度使用）掲載漢詩一覧

No.	作品名	作者名	『精選国語総合』（東京書籍）302	『国語総合 古典編』（東京書籍）304	『高等学校国語総合 古典編』（三省堂）306	『精選国語総合』（三省堂）307	『国語総合』（教育出版）309	『新編 国語総合 言葉の世界へ』（教育出版）310	『国語総合 古典編』（大修館書店）312	『精選 国語総合』（大修館書店）313	『新編国語総合』（大修館書店）314	『国語総合 古典編』（数研出版）316	『高等学校国語総合』（数研出版）317	『高等学校 国語総合』（明治書院）318	『精選 国語総合 古典編』（明治書院）320	『精選 国語総合 古典編』（筑摩書房）322	『国語総合』（筑摩書房）323	『高等学校新訂国語総合古典編』（第一学習社）325	『高等学校 国語総合』（第一学習社）326	『高等学校 標準国語総合』（第一学習社）327	『高等学校 新編国語総合』（第一学習社）328	『探究国語総合 古典編』（桐原書店）330	『国語総合』（桐原書店）331
18	登鸛鵲楼	王之渙	○		○		○		○	○		○	○									○	○
19	芙蓉楼送辛漸	王昌齢		○																			
20	回郷偶書	賀知章													○								
21	江雪	柳宗元	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○				
22	八月十五日夜禁中独直対月憶元九	白居易	○	○								○	○	○	○	○	○	○	○			○	○
23	香炉峰下新卜山居草堂初成偶題東壁	白居易			○	○	○	○	○	○										○			
24	秋夜寄丘二十二員外	韋応物									○					○	○						
25	秋日	耿湋												○	○								
26	楓橋夜泊	張継																				○	
27	涼州詞	王翰	○	○	○	○	○		○			○	○			○	○					○	○
28	江南春	杜牧			○		○							○	○			○	○				
29	山行	杜牧							○	○	○	○	○										
30	贈別	杜牧														○	○						
31	山亭夏日	高駢													○	○							
32	登楽遊原	李商隠									○												
33	代悲白頭翁	劉廷芝							○														
34	桂林荘雑詠示諸生	広瀬淡窓													○								
35	題自我	夏目漱石													○								

＊数字は教科書番号

【表2】 中学校「国語」教科書（平成28年度使用）掲載漢詩一覧

＊数字は教科書番号

No.	作品名	作者名	『新編　新しい国語2』（東京書籍）827	『現代の国語2』（三省堂）829	『国語2』（光村図書）831	『中学校国語3』（学校図書）928	『伝え合う言葉　中学国語3』（教育出版）930
1	春望	杜甫	○	○	○	○	○
2	絶句	杜甫		○	○		
3	黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る	李白	○	○	○		○
4	静夜の思ひ	李白				○	
5	春暁	孟浩然		○	○		○
6	元二の安西に使ひするを送る	王維				○	
7	江雪	柳宗元	○				
8	涼州詞	王翰	○				
9	翠岑を下る	良寛					○

以上の調査からもわかるように、高等学校「国語総合」教科書や中学校「国語」教科書において唐詩が中心に扱われている理由としては、塚田勝郎氏も指摘しているように、「盛唐期に作詩の規則が確立し、優れた詩人も多く世に出て、秀作を残した」こと、「漢文の入門段階では、平明で味わい深く、完成度の高い盛唐期と中唐期の作品が選ばれる傾向があり」、また、「江戸時代に唐詩のアンソロジーである『唐詩選』が爆発的に流行したこと」[3] などが挙げられる。

確かに、日本において唐詩が古くから親しまれてきたことや、字数・句数・押韻・対句・平仄のきまり等が完成していることからも、唐詩は学習者にとって比較的わかりやすく理解しやすいものであると考えられる。しかし、唐詩の特徴を理解し、歴史の流れの中でそれらを捉えながら読むためには、「古代の詩」から学び始めることは有効な方法ではないだろうか。リズムや音、漢詩の移り変わりや後代への影響についてより深く理解していくために、漢詩の学習の入門段階で古代の詩から順に時系列に学習していくことによって、その特色やきまりを理解させるだけにとどまらず、漢詩の歴史的変遷や展開をも捉えさせることができると考える。

そこで次章以降、中学校段階とは一線を画した高等学校における漢詩の扱い方の一例として、古代の詩から学習する漢詩の授業のあり方について、指導計画とそれに基づく実践をもとに考察していく。

3. 単元「漢詩の学習」の概要

前章で述べた授業を実践するために、高等学校１年次国語総合（漢文）において単元「漢詩の学習」を設定した。単元の目標、評価規準および指導計画は以下の通りである。

(1) 単元の目標

①漢詩に親しみ、伝統的な言語文化に対する関心を深める。

≪関心・意欲・態度≫

②漢詩に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わう。

≪読む能力≫

③漢詩の表現の特色について理解するとともに、漢詩の変遷と展開を時系列に捉える。 ≪知識・理解≫

(2) 単元の評価規準[4]

≪関心・意欲・態度≫

① 漢詩を内容や表現の特色に注意して積極的に読もうとしている。

② 漢詩に親しみ、伝統的な言語文化への興味関心を広げようとしている。

≪読む能力≫

① 漢詩に描かれた内容を、形式や表現の特色に即して読み取っている。

② 当時の人々の思いや考え方を読み味わうことにより、作品に対する理解を広げたり深めたりしている。

≪知識・理解≫

① 漢詩のきまりや形式、押韻などの表現の特色について理解している。

② 漢詩の変遷と展開を時系列に沿って理解している。

(3) 単元の指導計画（全４時間＋*２時間*）

第１時　『詩経』「桃夭」

第２時　曹植「七歩詩」、陶淵明「責子」

第３時　李白「静夜思」、王維「送元二使安西」

第４時　杜甫「登岳陽楼」

第５・６時　中国古典詩と「音」（お茶の水女子大学　和田英信先生）

このように漢詩を時系列に学習していく上で欠かせないものが、中国最古の詩集『詩経』である。『詩経』は「漢詩の源をなすもの」[5]であり、漢詩を歴史の変遷の中で捉えていくためには、最初に『詩経』を学習する必要がある。よって、単元「漢詩の学習」において、まずは中国最古の詩集である『詩経』を扱い、四言詩について学ぶ。次に、五言詩の「七歩詩」（曹植）と「責子」（陶淵明）を取り上げていく中で、唐代以前の詩について概観する。（ここで学習する五言詩は、これまでに高等学校国語教科書のいずれかに掲載されたことがあり、かつ内容の上でも高等学校１年次で扱うことが可能と判断されるものを取り上げた。）その後、五言詩の学習を踏まえて、前項で述べた「国語総合」教科書で多く取り扱われている、杜甫・李白・王維等の絶句や律詩を中心に扱う。その中で近体詩のきまりを学ぶとともに、詩の変化や唐代以前の詩が唐詩へと完成されてゆくさまを捉えさせ、漢詩への総合的な理解を深めさせたい。なお、本単元の年間指導計画における位置づけについては、本稿末尾 資料１ に示した。

また、指導にあたっては、『高等学校学習指導要領』「国語総合」の「C　読むこと」の「3 内容の取扱い」に「古典の教材については、表記を工夫し、注釈、傍注、解説、現代語訳などを適切に用い、特に漢文については訓点を付け、必要に応じて書き下し文を用いるなど理解しやすいようにすること。」とあることから、中学校で学んだ漢詩の基礎的な知識の上に立ち、理解しやすいよう教材を工夫しながら適切に指導を行い、漢詩に描かれた情景、心情などを表現に即して読み味わうことのできるよう心掛ける。

さらに、本単元では、お茶の水女子大学文教育学部言語文化学科中国語圏言語文化コースの和田英信先生をお招きして、第５・６時において「中国古典詩と『音』」に関する講義をしていただく。和田英信先生の講義で実際に使用した資料は本稿末尾 資料２ に示した。

4. 漢詩入門教材としての『詩経』「桃夭」の実際

第３章で設定した単元「漢詩の学習」の適切性およびその有効性を確かめるため、高等学校１年次国語総合（漢文）において、第１時『詩経』「桃夭」の授業を単元の

指導計画に基づき、実施した。[6]

第２章でも述べた通り、現在「国語総合」教科書には唐詩しか扱われておらず、『詩経』も含めた「古詩」の掲載はない。しかし、「古典Ｂ」教科書には一部掲載があるため、高等学校段階で扱うことが可能な教材ではある。また、『詩経』の中で「古典Ｂ」教科書に最も多く掲載されている詩は「桃夭」である。[7] そこで、漢詩の入門教材としての『詩経』「桃夭」の授業実践を通して、『詩経』という漢詩教材の可能性や、古代の詩から学習する漢詩の授業の有効性について考えていきたい。

4.1.『詩経』および「桃夭」について

『詩経』は、「おおよそ周のはじめから春秋時代の末ごろまで、紀元前十二世紀から紀元前六世紀までの詩が、三百五編、集められ」[8]、「或は集団的に歌唱された民謡、或は宴席に奏した歌、或は祝禱の歌、或は人を諫める諷刺の歌、或は神明に奏して子孫のまごころを通ずる祭祀の歌などがその多くの部分を占める」[9] といわれる、「中国古代歌謡の集成」[10] である。石川忠久氏によれば、「『詩経』の特色は、第一に四言詩ということ」であり、「一句が四字からなり、四句で一章をなし、三章で一篇をなす、というのが、典型的な形式」で、「むろん、字余りもあれば、何章にもわたる長いものもありますが、四言で、単純なくり返しの、素朴な歌というのが、『詩経』の一大特色」[11] であると指摘されている。また、「桃夭」についても同様に「この詩は、全部で三章、一章は四句、一句は四字でできておりますが、これが『詩経』の典型的な形式の一つ」[12] と述べられているため、「桃夭」の理解は『詩経』の形式の理解に直接つながるものだと言えるだろう。加えて、第一章から第三章まで同一表現を繰り返しながら内容を展開させている点にこの詩の大きな特徴があり、まずは、その特徴について生徒自身で気付かせたい。

また、王秀文氏によって「『桃夭』とは若くて美しい女子に喩えられているいっぽう、嫁ぎに行く年ごろの娘のことを言い表している」[13] と指摘されているように、桃の華には花嫁の意が込められている。さらに、「美しい花ばかりをいわず、大きい実といい、茂った葉という、娘が嫁いでよい子を多く持って一族繁栄する事を祝した」[14] や、「この詩では嫁いでいく娘の愛らしさを桃の花に、子宝を桃の実に、子孫繁栄を桃の繁る葉にたとえている」[15] という指摘からもわかるように、この詩からは結婚・出産・繁栄を願う古代の人々の素朴な思いを読み取ることができる。その内容部分に関しても、生徒の意見をもとにやりとりを重ね、意見を共有していく中で迫っていきたいと考える。

なお、「桃夭」の解釈については、古注にみられるような「王妃の徳」とする解釈をはじめ、西口智也氏の「古代から清朝末期に至る長い歴史の中では、≪桃夭≫の中の『（嫁いでいく）娘』は、『美しく』『若々しい』だけではなく、『賢い女性』としてイメージされてきた」[16] などの複数の解釈が存在するが、ここでは「古典Ｂ」教科書や指導資料等に多くみられる、嫁入りする娘を桃にたとえて結婚を祝う詩とする解釈を採用し、授業を行うものとする。

以上のことを踏まえ、「桃夭」ではその表現の効果や特色などを理解させるとともに、同一表現の中に見られる変化に着目させることで、内容の展開を読み取らせたいと考える。

4.2. 本時の授業展開

対象学年：高等学校 1 年次　40 名

単元：国語総合（漢文）

「桃夭」（『詩経』）[17]（「漢詩の学習」全 6 時間中の第 1 時）

(1) 本時のねらい

①漢詩に親しみ、伝統的な言語文化への関心を深める。　≪関心・意欲・態度≫

②「桃夭」に描かれた内容を表現に即して読み取ることで、詩に対する理解を深める。　≪読む能力≫

③中国最古の詩集『詩経』を読むことを通して、古代の詩の特色を理解する。　≪知識・理解≫

(2) 本時の展開および学習活動

A．導入（5 分）

ⅰ）・本時の学習内容を確認する。
・これまで学習したことのある漢詩について確認する。
・既習の漢詩の知識および漢詩のきまり等について確認する。

ⅱ）・『国語便覧』を使用し、年表を確認する。
・中国最古の詩集『詩経』の詩を学ぶこと、これから漢詩を時系列に学習していくことを確認する。

B．展開Ⅰ（20 分）

ⅰ）・「桃夭」を繰り返し音読する。
・隣同士でペアになって音読する。→全員で音読する。→生徒だけで再度音読する。→「白文」を見て音読する。

ⅱ）・「桃夭」を読んで気付いた点を挙げ、ノートに記入する。
・どのような特色に気付いたか、発表する。

ⅲ）・「桃夭」の形式や表現の特色について確認する。
・表現の「変化」を理解する。

ⅳ）・第一章第四句の「室家」が、第二章第四句では「家室」となっているのはなぜか考える。
・押韻のために語順が入れ替わっていることを理解する。

C．展開Ⅱ（20 分）

ⅰ）・この詩の「桃」とは何を表しているか考える。
・この詩で、「華」「実」「葉」がたとえているものはそれぞれ何か考える。

ⅱ）・この詩の主題を理解する。

・古代中国の人にとっての「桃」とはどのようなものか理解する。
・あらためて全体を音読する。（暗誦）

iii）・『詩経』の他の詩を読み、その特徴について確認するとともに、中国最古の詩集『詩経』に対する理解を深める。

D． まとめ（5 分）

ｉ）本時の学習を振り返り、次時の学習について確認する。

(3) 評価規準と評価方法

評価規準は第 3 章の (2) で述べた単元の評価規準を用いることとする。また評価方法は原則として①観察・点検（学習の中での発言や行動の観察、机間指導による記述の点検）、②確認（学習の中での発言や行動の内容の確認・学習の中で記述された内容の確認）、③分析（行動の観察や行動の確認を踏まえた実現状況の高まりの分析）の 3 段階によるものとする。

(4) 評価について

評価の基準および生徒への手立ては以下の通りとする。

【十分満足できる（A)】

「桃夭」に描かれた内容を表現に即して読み味わうとともに、古代の詩の特色を理解している。

【おおむね満足できる（B)】

言葉の意味や形式の特色を理解し、「桃夭」に描かれた内容を表現に即して読み取っている。

【努力を要する（C)（評価 B に達しない）生徒への手立て】

助言を与え段階を踏んで考えさせたり、ノートや課題を提出させたりすることによって継続的に指導し学習の定着を促す。

(5) 指導にあたって

本時の学習者である 1 年次生徒は入学してからこれまでの間、文章を多読する中で漢文の訓読のきまりや句形など基本的事項を学習してきた。また、時代の流れを意識しながら文章を読むことを日頃から重視しており、今回はそれらの授業を受けて初めて「漢詩の学習」に入ることになる。そこでこの単元では､「桃夭」を音読し、内容について主体的に考えたり他の生徒の意見を聞いたりする中で、表現の特色に気付かせ、詩に対する理解を深めさせていきたいと考える。

4.3. 授業の実際

A． 導入について

まず、これまで漢詩を学習したことがあるか全体に問うたところ、杜甫の「春望」

や「絶句」、李白「黄鶴楼送孟浩然之広陵」、孟浩然「春暁」などがあがった。その場でははっきりと題を思い出せない生徒もいたが、漢詩の一部を聞くと思い出し、「知っている」という反応を示した。おおよそクラスの８割以上の生徒は漢詩に触れた経験があった。また、漢詩のきまりについても、「形式についてどのように習ったか」、「字数はどのようだったか」などと問うと、一部の生徒から、「律詩」や「絶句」、「五言」や「七言」という言葉があがった。ここからも、唐詩に関しては中学校段階で学習経験があることが確認できた。この際、五言や七言などの「言」について「漢字は表意文字で、一字が一つの意味、すなわち一つの単語（言葉）を表すので、一字が一言」[18]であると簡潔に説明し、本実践の展開Ｉで行う、押韻を考える活動につなげた。

その後、「杜甫や李白、孟浩然の詩はいつ頃つくられたものか」との発問をしたが、時代についてはすぐに意見が出なかったため、『最新国語便覧』[19]の年表を用いて視覚的に時代の流れを捉えさせた。また、「これまで習ってきた詩は唐代の詩であること」および「今後は漢詩を古い時代から順に時系列に学ぶこと」、「古代の詩とはどのようなものか中国最古の詩集『詩経』を通して学んでいくこと」を伝え、展開Ｉへとつなげた。

Ｂ．展開Ｉについて

ここでは、「桃夭」の詩を繰り返し音読させる活動を行った。音読を複数回こなしていくことで、生徒自身で自然に詩のリズムや形式の特色に気付くことができると考えたためである。このような意図のもと複数回音読をさせた後、「この詩を読んで気付いたこと、思ったこと、感じたことはどのようなことか」と問い、各自でノートに書き出させた。

その後、「形式の特徴」で気付いたことを発表させた。発表時に生徒から出た意見は以下の通りである。

・同じ「句」の繰り返しが多い。
・「宜其」が同じである。
・一句が四字。　（⇒「四言」）
・三つのまとまりがある。　（⇒「三章」）
・「夭夭」「灼灼」「蓁蓁」などの同じ語を重ねる表現がある。　（⇒「重言」）

形式の特徴について発表する際、繰り返しが多いことに言及しようとしている生徒が、「四字のまとまり」をどのように表現すればよいのかわからずにいたため、まず「四字＝一句」と「四句＝一章」であることを黒板に図示しながら全体で確認した。また、これまで五言や七言の詩にはなじみがあったが、四言詩は初めてであったことから「四字＝四言」であることも付け加え、四言で四句ずつ三章からなる詩の形式の理解へとつなげた。さらに「夭夭」「灼灼」「蓁蓁」などの同じ語を重ねる表現が「重言」であることも確認した。

以上のように形式の特徴と、詩に見られる共通点を理解した後、「違う部分、変化

している部分はどのようなところか」と発問した。すると生徒から

・内容が一章から三章で「華→実→葉」と変化している。

という意見が出た。さらに違う部分はないかと、各句のことばを比べてみるように促した。その結果、

・一章の「室家」の部分が、二章では「家室」となっている。

・同じ部分が三章では「家人」と変化している。

という意見を引き出すことができた。

ここで、「室家」と「家室」は同様の意味であることを確認した。その上で「同じ意味であるにも関わらず、なぜ、「室家」を「家室」と変えているのか」という問いを投げかけ、時間を取って考えさせた。この活動では「室家」・「家室」が句の末尾に来ていることに着目させ、音の違いに気付かせることで押韻の理解につなげたいというねらいがあった。しばらく意見交換などをさせた結果、生徒の中から「華と家、実と室、蓁と人が同じ音になっている。」という気づきがあったため、その生徒の意見を生かして、「押韻」についてまとめた。（意見が出ない場合には、A．導入で確認した、漢字には意味と音があることを手がかりに気づきを促す予定であった。）

C．　展開Ⅱについて

ここではまず、「桃の華とは何を表しているか」を考えさせた。少し時間を取り、全体に意見を求めたところ、生徒から「花嫁ではないか」という意見が出てきた。なぜそのように考えたのか問うたところ、「帰（とつ）ぐ」という言葉があることから連想したとのことだった。（ここで意見が出ない場合には、やはり「之子于帰」などを手がかりに発言を促す予定であった。）それを踏まえて次に、「実」と「葉」は何を表しているか考えさせたところ、「実」が「子ども」を表すという意見はすぐに出た。しかし、「葉」が表すものはすぐには出なかった。そこで今一度「蓁蓁」＝「葉が盛んに茂っている様子」という意味を確認して、前の章とのつながりを問うた。すると生徒から「子どもが増える」という意見を引き出すことができた。以上の意見をもとに、「実がなり、葉が繁る」ことと、「子どもができ、家族が増えること」とを結びつけ、「桃夭」にうたわれているものは「嫁ぎゆく娘とその家の繁栄」であり、古代の人々にとって家と子孫の繁栄は最も重要なものであったことを全体で共有した。

さらに、生徒の想像力を喚起するために、古代中国の人にとっての「桃」とはどのようなものであったかを写真[20]を提示しながら説明し、桃は古代中国では身近な花で「赤く燃え立つように咲く桃は、それ自体が生命力の象徴であり、またそれゆえに辟邪（魔除け）の霊能を持つものとも考えられた」[21]ことを確認した。

最後に、そのような桃やこの詩の全体をイメージしながら、全員で詩を再度音読した。その際、できれば暗誦するように告げるとともに、本時で学習した繰り返しの多い表現や押韻等も意識するよう促した。

その後、「この詩の作者は誰か」という問いをあえて投げかけた。この発問には、『詩

経』の性質そのものを考えさせたいというねらいがあった。「詩経の作品は特定の作者というのが存在しない。ほとんどが無署名の作品である。また、各作品は、単一の詩人によって作られたものではない。（中略）現在に残っている形のものは、多数の大衆により時間を経過させて幾多の変化をへ、結果的にそうした形にまとめられたものである」[22] ということを、ここであらためて確認した。

また、『詩経』についてより理解を広げ深めるために、「桃夭」以外の 3 つの詩「鵲巣」、「君子于役」、「蹟鼠」を紹介した[23]。配布資料は本稿末尾 資料３ に示した。

一つ目の「鵲巣」は、「桃夭」と同じ三章から成り立つ形式をとっており、「之子于帰」という表現も共通している。『詩経』の中で鳥は、多く結婚の吉祥としてうたわれること、この詩も男女の婚姻のことをうたっていることを確認した。二つ目の「君子于役」は、仕事のために遠くに行ってしまった夫の身の上を思っている詩である。これは少し形式が違っていて、二つの章しかないこと、また基本的には四言だが、三言、五言となっている部分もあることを確認し、『詩経』にはまだ厳密な詩の形式の決まりはないこと、そのため句の数や章の数も一定ではないことを示した。三つ目の「蹟鼠」とは、大きなネズミの意味であり、生活の厳しさをうたっていることを訳を参考にさせつつ確認した。またここで、「古代の民の生活を苦しめているものは何か」という発問をした。すると、「厳しい政治」や「重い税」という意見が生徒の方から出てきた。このような発言につながった背景には、1 学期の漢文の授業において『論語』や、孔子に関わる「苛政猛於虎」（『礼記』）を学習していたことがある。既習の内容と『詩経』の詩にみられる「生活を苦しめるもの」との共通項を見出すことができた点は、評価できる部分であり、ここでのやり取りから『論語』や孔子の時代における『詩経』の扱われ方にまで内容を発展させることができた。「後世、詩の源流としてあおがれるとともに、孔子学派（儒家）の教科書として尊重され（中略）また、春秋時代から、戦国時代にかけて、外交官の必須の教養書としても重んじられた」[24] と言われているように、『詩経』は古代の人々の日常や生活から生まれた歌であり、人々がどのような暮らしをし、どのような考えを持っていたのか『詩経』をよむことで見えてくる。そのために、理想の政治や学問にとって必要なものとされたということを全体で共有した。

Ｄ． まとめについて

本時の授業では『詩経』について学習し、その詩の中には、結婚を祝うものや夫の帰りを待つ様子をうたったもの、生活の苦しさを訴えたものなど、古代の人々の日常や現実に寄り添った詩が多く存在するということを確認した。そしてこれが詩のはじまりであり、漢詩の最も古い形であること、また、ここから唐詩が完成するまでには長い年月がかかり、その中で一体どのようにして詩が変化していったのか、時代の流れの中で詩をよみながら学習していくことを予告し、次時へとつなげた。

4.4. 授業実践の成果

本時の授業は、漢詩に親しみ伝統的な言語文化への関心を深めること、「桃夭」に描かれた内容を表現に即して読み取ることで詩に対する理解を深めること、および、中国最古の詩集『詩経』を読むことを通して古代の詩の特色を理解することをねらいとしていた。

まず、複数回音読を行わせることで、「桃夭」の特徴である繰り返しが多く四言四句で三章からなる形式や、表現の特色に気付かせることができた。また、同一表現の中に見られる変化に着目させることで、その内容の展開を読み取らせるとともに、押韻の理解へとつながったのだと考える。さらに、桃の華・実・葉がたとえているものは何か考える活動においても、事前の知識や習熟度によらず、本文を根拠に生徒同士の意見交換や話し合いの中から、それらが何を表現しているのか生徒自身が導き出し、「桃夭」の主題にせまることができた。このような言葉の変化からみる「桃夭」の内容へのアプローチは、加納喜光氏が指摘する「パラディグム変換」[25]にもつながるものである。この詩の「華→実→葉」および「室家→家室→家人」という変化は、詩全体に動的なイメージをもたらしており、この点について単なる説明にとどまることなく、生徒の主体的な活動の中で、可能な限り生徒自身の発言をもとに詩の「読み」に近づけていくことで、漢詩への興味関心をより高めることができたと考える。

以上のことから、『詩経』は「国語総合」教科書には掲載されていない教材ではあるが、高等学校1年次における最初の漢詩の授業で扱うことが可能な教材であると考える。またその中でも特に「桃夭」は、内容も身近でわかりやすく、生徒が主体的に詩の言葉そのものから内容を捉え、解釈の楽しさを感じることができる詩であり、入門期にふさわしい教材であると言える。

5. まとめと考察 ―漢詩を古代から学ぶ意義―

本稿では漢文に対する理解を深める授業の試みの一例として、漢詩の学習に焦点をあて、古代の詩から時系列に学習する授業展開の可能性について、特に漢詩の入門教材としての『詩経』「桃夭」の授業をもとに考察してきた。前章で、『詩経』「桃夭」は漢詩の入門教材になり得るということを述べたが、ここでは今一歩踏み込んで、漢詩を古代から学習することの意義について考えたい。

第3章の単元の指導計画で示したように、この後授業は『詩経』から五言詩、六朝時代の詩を経て、唐詩の学習へと進んでいく。唐代の近体詩へとつながっていくこの歴史の変遷の中で詩は、語数や句数を変え、音を明確に意識するようになり、リズムを一層重視していく。したがって、まず古代の詩から扱うことで、その音やリズムの源流を確認することができ、唐詩の平仄へとつながる「音の変化」を捉えることができると考える。また、和田英信氏が「古詩や楽府は作者不詳の作品であった。建安詩とそれ以前の古詩や楽府とを隔てる大きな相違点は、作者の署名の有無である、ととりあえずいうことができるだろう」[26]と指摘しているように、詩のもう一つの大きな

変化としてあげられるのが、「作者の署名の有無」である。『詩経』の特徴に見られるように、詩はもともとうたわれるものであり、皆で共有するものだったため、『詩経』の頃の古代の詩は作者を定める必要性がなく、その意識も持っていなかった。それに対して、時代を下ると詩は「個人の思い」をよむものとなり、署名をともなっていく。この、うたうものからよむものへの変化は、文学の誕生という視点から考えても中国の詩の歴史にとって非常に重要かつ大きな変化である。そして、その変遷は、『詩経』からみていくことで初めて理解し捉えることができるのだと考える。

このように、漢詩学習の入門段階において、唐詩から学習していくのではなく古代の詩から時系列に学習していくことによって、漢詩に描かれた情景や心情などを表現に即して読み味わうことや、詩のきまりを理解することだけにとどまらず、音やリズムの意識の獲得とその変化や、漢詩という文学の歴史的変遷をも捉えさせることができる。以上のような高等学校段階における新たな漢詩学習の方法によって、時代を超えたつながりを意識させることができ、真に漢詩を生き生きとよむことが可能になると考える。

6. おわりに

現在の学校教育現場における漢文教育のあり方は、社会の中での伝統的言語文化の重要性の高まりに未だ十分に対応しているとは言い難く、今後一層研究が進められていくべき領域である。本稿では入門教材としての『詩経』「桃夭」の実際に焦点化していたため、その後の学習の流れについては詳細に触れることができなかった。また、漢文教材における漢詩以外の史伝や思想に関する文章の扱い方についても新たに研究開発が必要な部分であるだろう。それらの点については今後の課題としたい。

1 文部科学省『高等学校学習指導要領』(2009 年 3 月)
2 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 国語編』(2010 年 6 月)
3 塚田勝郎『新人教師のための漢文指導入門講座』(大修館書店 2014 年 11 月 ,81 頁)
4 評価規準の作成にあたっては、国立教育政策研究所教育課程研究センター「評価規準の作成, 評価方法等の工夫改善のための参考資料 (高等学校 国語) ～新しい学習指導要領を踏まえた生徒一人一人の 学習の確実な定着に向けて～」(2012 年 7 月) (http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/kou/01_kou_kokugo.pdf?time=1461430269988) を参照した。(2015 年 11 月現在)
5 石川忠久『新 漢詩の世界』(大修館書店 2006 年 4 月 ,2 頁)
6 2015 年 11 月に行われた、本校第 20 回公開教育研究会にて実施した。
7 『詩経』の高等学校国語教科書掲載状況については、西口智也「『詩経』桃夭編―漢文教材としての可能性―」(「新しい漢字漢文教育」(49), 全国漢文教育学会 2009 年 11 月 , 65-75 頁) に詳しい。
8 石川忠久『漢詩への招待』(文藝春秋 2005 年 10 月 , 32 頁 . 初出は新樹社 1987 年 5 月)
9 目加田誠『詩経』(講談社 1991 年 1 月 ,13 頁)
10 白川静『詩経』(中央公論社新社 1970 年 6 月 ,1 頁)
11 石川忠久『新 漢詩の世界』(大修館書店 2006 年 4 月 ,3 頁)
12 石川忠久『新 漢詩の風景』(大修館書店 2006 年 4 月 ,205 頁)
13 王秀文「桃の民族誌―そのシンボリズム (その 2)」(「日本研究」(19), 国際日本文化研究センター 1999 年 6 月 ,123-158 頁)。同氏は「容貌の美しさ、肉体の豊満さ、そして生産力を一体のものとして、若い女性の具えている成熟した性的魅力を、余すところなくありありと表している。」とも指摘している。この点については白川静氏も『詩経』(中央公論社新社 1970 年 6 月 ,128 頁) において「桃が美しい婦人への連想をもつことは、一おう考えてよいであろう。」と述べている。
14 目加田誠『詩経』(講談社 1991 年 1 月 ,54 頁)
15 岸田知子『漢語百題』(大修館書店 2015 年 3 月 ,43 頁)
16 西口智也「『詩経』桃夭編―漢文教材としての可能性―」(「新しい漢字漢文教育」(49), 全国漢文教育学会 2009 年 11 月 , 65-75 頁)
17 『古典Ｂ 漢文編』(大修館書店) の本文を使用した。
18 一海知義『漢詩入門』(岩波書店 1998 年 6 月 ,5 頁) による。
19 『最新国語便覧』(浜島書店 ,342-344 頁)
20 潘富俊 (著) , 呂勝由 (攝影)『詩經植物圖鑑』(貓頭鷹出版 2001 年 6 月 ,24-25 頁)
21 松原朗『漢詩の流儀―その真髄を味わう』(大修館書店 2014 年 11 月 ,132 頁)
22 鈴木修次『中国古代文学論―詩経の文芸性―』(角川書店 1977 年 3 月 ,15 頁)
23 「鵲巣」、「君子于役」、「蹟鼠」 の解釈は、目加田誠『詩経』(講談社 1991 年 1 月) による。

24 石川忠久『漢詩への招待』(文藝春秋 2005 年 10 月 , 33 頁 . 初出は新樹社 1987 年 5 月）による。この点については、鈴木修次氏も『中国古代文学論―詩経の文芸性―』（角川書店 1977 年 3 月 ,22 頁）において「詩経と書経は、単にことばの学習の面のみにおいて教科書であったのではあるまい。孔子は、孔子が理想的政体として考える周王朝（紀元前十二世紀から始まる王朝）の政治具体が、この二書からきわめてよくうかがえると考えたことが、より主要にはあったにちがいない。」と指摘している。

25 加納喜光氏は『詩経・Ⅰ　恋愛詩と動植物のシンボリズム』(汲古書院 2006 年 3 月 ,172 頁）において「華→実→葉という植物体の部分をとらえた語の言い換えは、いうまでもなく時間の推移を暗示する。」また、「女性のとけこむ世界の範囲の拡大と照応し、同時に、桃のシンボル的な意味から来る、女性による多産と繁栄への期待がこめられているのである。」と述べている。

26 和田英信「建安文学をめぐって」(「三國志研究」第一号 , 三國志学会 2006 年 12 月 , 34-44 頁)。また同氏は「署名をともなって詩が行われるようになったから詩が変わったのではなく、詩の書き方、読まれ方も含めて詩のあり方が変わったから、作者の署名がともなうようになった、というべきなのかも知れない。」とも指摘している。

【引用文献一覧】

・石川忠久『漢詩への招待』（文藝春秋 2005 年 10 月 , 初出は新樹社 1987 年 5 月）
・石川忠久『新 漢詩の世界』（大修館書店 2006 年 4 月）
・石川忠久『新 漢詩の風景』（大修館書店 2006 年 4 月）
・一海知義『漢詩入門』（岩波書店 1998 年 6 月）
・王秀文「桃の民族誌―そのシンボリズム（その 2)」（「日本研究」（19）, 国際日本文化研究センター 1999 年 6 月 ,123-158 頁)。
・加納喜光『詩経・Ⅰ 恋愛詩と動植物のシンボリズム』（汲古書院 2006 年 3 月）
・岸田知子『漢語百題』（大修館書店 2015 年 3 月）
・国立教育政策研究所教育課程研究センター「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料（高等学校 国語）～新しい学習指導要領を踏まえた生徒一人一人の 学習の確実な定着に向けて～」（2012 年 7 月）（http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/kou/01_kou_kokugo.pdf?time=1461430269988）
・白川静『詩経』（中央公論社新社 1970 年 6 月）
・鈴木修次『中国古代文学論―詩経の文芸性―』（角川書店 1977 年 3 月）
・塚田勝郎『新人教師のための漢文指導入門講座』（大修館書店 2014 年 11 月）
・西口智也「『詩経』桃夭編―漢文教材としての可能性―」（「新しい漢字漢文教育」（49），全国漢文教育学会 2009 年 11 月 , 65-75 頁）
・潘富俊（著）, 呂勝由（攝影）『詩經植物圖鑑』（貓頭鷹出版 2001 年 6 月）
・松原朗『漢詩の流儀―その真髄を味わう』（大修館書店 2014 年 11 月）
・目加田誠『詩経』（講談社 1991 年 1 月）
・文部科学省『高等学校学習指導要領』（2009 年 3 月）
・文部科学省『高等学校学習指導要領解説 国語編』（2010 年 6 月）
・和田英信「建安文学をめぐって」（「三國志研究」第一号 , 三國志学会 2006 年 12 月 , 34-44 頁）

資料 1

年間指導計画における位置付け

年間目標：「歴史のうねりと社会」という学年テーマに即し、良質な漢文を読ませることにより、生徒の読解力、思考力、表現力を育成する。

2015 年度　1 年次国語総合（漢文）

	≪年間指導計画≫ テーマ「歴史のうねりと社会」
一学期	漢文入門（「守株」「杞憂」） 「論語」（学而時習之・学而不思則罔） （由誨・志学） 「苛政猛於虎」 再読文字 「臥薪嘗胆」 「五十歩百歩」（孟子） 「大道」「小国寡民」（老子）
二学期	「胡蝶之夢」「混沌」（荘子） 「鶏口牛後」 「鴻門之会」 **漢詩の学習（本単元）**
三学期	「四面楚歌」 「項王自刎」 「三国志」

＊（参考）2014 年度 2 年次実施内容

	≪年間指導計画≫ テーマ「女性・人生」
一学期	「知音」「病入膏肓」 「管鮑之交」 「晏氏之御」「江南橘為江北枳」 「先従隗始」「孟母三遷」 「不忍人之心」（孟子） 「人之性悪」「星隊木鳴」（荀子） 「侵官之害」「処知則難」（韓非子）
二学期	「曳尾於塗中」「荘子妻死」（荘子） 「完璧而帰」「刎頸之交」 「王昭君」「糟糠之妻」 「桃花源記」（陶潜） 漢詩の学習
三学期	「春夜宴桃李園序」（李白） 「雑説」（韓愈）　「黔之驢」（柳宗元） 「売油翁」（欧陽脩） 「読孟嘗君伝」（王安石）

本校国語科では、学年ごとのテーマを設定し、そのテーマに沿って古典を「時系列」に学習する授業を実践している。1 年次のテーマは「歴史のうねりと社会」、2 年次のテーマは「女性・人生」である。

資料２　お茶の水女子大学文教育学部言語文化学科中国語圏言語文化コース 和田英信先生

中国古典詩と「音」

［１］詩と翻訳

○井伏鱒二と会津八一

・会津八一

1881（明治 14）―1956（昭和 31）、歌人、美術史家、書家。

　韋応物「秋夜寄丘二十二員外」（会津八一『鹿鳴集』所収）

懐君属秋夜，散歩詠涼天。山空松子落，幽人応未眠。

あきやま　の　つち　に　こぼるる　まつ　の　み　の　　おと　なき　よひ　を　きみ
いぬ　べし　や

・井伏鱒二

1898（明治 31）―1993（平成 5）、小説家。

　于武陵「勧酒」　（以下、井伏鱒二『厄除け詩集』所収）

勧君金屈巵，満酌不須辞。花発多風雨，人生足別離。

コノサカヅキヲ受ケテクレ
ドウゾナミナミツガシテオクレ
ハナニアラシノタトヘモアルゾ
「サヨナラ」ダケガ人生ダ

　韋応物「秋夜寄丘二十二員外」

懐君属秋夜，散歩詠涼天。山空松子落，幽人応未眠。

ケンチコヒシヤヨサムノバンニ
アチラコチラデブンガクカタル
サビシイ庭ニマツカサオチテ
トテモオマヘハ寝ニクウゴザロ
　※「ケンチ」中島健蔵、井伏鱒二の友人、フランス文学者。

［２］中国古典詩（いわゆる漢詩）の「音」

○音数律：一句あたりの音（文字）の数、句の数

○押韻：特定の箇所（多くは偶数句末）に類似音をおく

「桃夭」（『詩経』より）

桃之夭夭，灼灼其華。之子于帰，宜其室家。

　「桃夭」の押韻――華・家（カ・カ）

資料２　お茶の水女子大学文教育学部言語文化学科中国語圏言語文化コース 和田英信先生

○声調の認識と四声律、平仄律

現代中国語の声調

媽　mā　　第１声　高く平らか
麻　má　　第２声　上昇
馬　mǎ　　第３声　低く平らか
罵　mà　　第４声　下降

〈昔と今の声調の対応〉
平声　→　第１声・第２声
上声　→　第３声（一部は第４声）
去声　→　第４声
入声　→　第１・２・３・４声

中古音（隋唐期の中国語の音）の声調
―平声、上声、去声、入声
※「入声」は子音でおわる促音（現代中国語では、この子音が脱落）
　例：「立」「入」ジフ（漢音）・ニフ（呉音）（「リツ」は慣用音）
　　「月」ゲツ（漢音）・グヮチ・グヮツ（呉音）
　　「一」イツ（漢音）・イチ（呉音）
　　「屋」オク
　　「色」ショク（漢音）・シキ（呉音）
※漢音は唐代の長安の音、呉音は六朝・江南の音
※声調が意識され、さらにそれを文学表現に応用することが試みられるようになったのは南朝の斉梁期（斉 479-501、梁 502-557、ともに王朝の名　）

日本・空海（774-835）『文鏡秘府論』天巻「四声論」
　経（劉善経）数聞江表人士説、梁王蕭衍不知四声、嘗縦容謂中領軍朱异曰「何者名為四声？」朱异答云「天子万福、即是四声」。衍謂异「天子寿考、豈不是四声」。以蕭主之博洽通識、而竟不能弁之。時人咸美朱异之能言、歎蕭主之不悟。（隋・劉善経「四声指帰」からの引用）
　――　私は南方の人々が「梁の王である蕭衍は四声を知らなかった」というのをしばしば耳にした。あるとき蕭衍はおもむろに中領軍（の官にあった）朱异にきいた。「四声というのはいったい何か？」。朱异が「“天子万福”というのが、まさに四声です」と答えると、蕭衍は朱异に「では“天子寿考”も四声だろうね」と。蕭衍ほどの博識の人でも、四声をよく理解できなかったのである。当時の人々はみな朱异のたくみな応答をほめ、蕭衍ののみこみの悪さを嘆いた。

天	→	平声	天	→	平声
子	→	上声	子	→	上声
万	→	去声	寿	→	去声
福	→	入声	考	→	上声

・平仄律の整理と近体詩の完成
平声　→　「平」（○）、　上声・去声・入声　→　「仄」（●）、◎は押韻字

資料２　お茶の水女子大学文教育学部言語文化学科中国語圏言語文化コース　和田英信先生

李白「早発白帝城」（七言絶句）

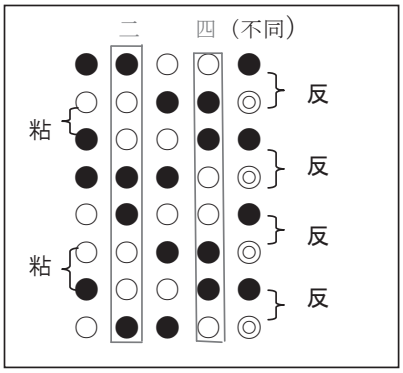
朝辞白帝彩雲間	zhāo cí bái dì cǎi yún jiān	○○●●●○◎
千里江陵一日還	qiān lǐ jiāng líng yí rì huán	○●○○●●◎
両岸猿声啼不住	liǎng àn yuán shēng tí bù zhù	●●○○○●●
軽舟已過万重山	qīng zhōu yǐ guò wàn chóng shān	○○●●●○◎

平声＝１・２声は○
上声・去声＝３・４声は●
入声（日本の漢字音で、「フ」「ツ」「チ」「ク」「キ」でおわるもの）が●

○　平仄律
一句のなかで――「二四不同」「二六対」（一三五不論）
句と句のあいだで、「反（対）」と「粘」

唐・杜甫「春望」（五言律詩）♪

国破山河在	guó pò shān hé zài
城春草木深	chéng chūn cǎo mù shēn
感時花濺涙	gǎn shí huā jiàn lèi
恨別鳥驚心	hèn bié niǎo jīng xīn
烽火連三月	fēng huǒ lián sān yuè
家書抵万金	jiā shū dǐ wàn jīn
白頭搔更短	bái tóu sāo gèng duǎn
渾欲不勝簪	hún yù bù shēng zān



反法
１・２、３・４、５・６、７・８というように、奇数句と偶数句の二句単位でみたとき、第２字、第４字、（七言詩の場合、加えて第６字）の平仄が異なる。
「破」と「春」、「河」と「木」など。

粘法
まず四句単位（１～４句、５句～８句）でみる。
そのとき、なかの二句（第２句と第３句、律詩の場合は加えて第６句と第７句）の第２字、第４字、（七言詩の場合、加えて第６字）の平仄が同じになる。
「春」と「時」、「木」と「濺」
「書」と「頭」、「万」と「更」
（なお律詩の場合、同じ平仄パターンの四句をふたつ繰り返すかたちになるので、結果として第４句と第５句の「別」と「火」、「驚」と「三」も同じ平仄になる。）

○　律詩――杜甫による完成

資料２　お茶の水女子大学文教育学部言語文化学科中国語圏言語文化コース　和田英信先生

唐・杜甫「登高」（七言律詩）

風急天高猿嘯哀	fēng jí tiān gāo yuán xiào āi	○●○○○●◎
渚清沙白鳥飛迴	zhǔ qīng shā bái niǎo fēi huí	●○○●●○◎
無辺落木蕭蕭下	wú biān luò mù xiāo xiāo xià	○○●●○○●
不尽長江袞袞来	bù jìn cháng jiāng gǔn gǔn lái	●●○○●●◎
万里悲秋常作客	wàn lǐ bēi qiū cháng zuò kè	●●○○○●●
百年多病独登台	bǎi nián duō bìng dú dēng tái	●○○●●○◎
艱難苦恨繁霜鬢	jiān nán kǔ hèn fán shuāng bìn	○○●●○○●
潦倒新停濁酒杯	liǎo dǎo xīn tíng zhuó jiǔ bēi	●●○○●●◎

李白 Lǐ Bái　静夜思 Jìng　yè　sī　リー・パイ　　チン・イエ・スー

※拗体詩（平仄のきまりにとらわれない詩）

床前看月光　chuáng　qián　kàn　yuè　guāng
○○●●◎　チュアン・チエン・カン・ユエ・クアン
疑是地上霜　yí　shì　dì　shàng　shuāng
○●●●◎　イー・シー・ディ・シャン・シュアン
挙頭望山月　Jǔ　tóu　wàng　shān　yuè
●○●○●　チュー・トウ・ワン・シャン・ユエ
低頭思故郷　dī　tóu　sī　gù　xiāng
○○○●◎　ディー・トウ・スー・クウ・シアン

杜甫 Dù Fǔ　登岳陽楼 Dēng　Yuè yáng lóu　　トゥ・フゥ　トゥン・ユエ・ヤン・ロウ

昔聞洞庭水　xī　wén　Dòng　tíng　shuǐ
●○<u>●○●</u>　シー・ウエン・トゥン・ティン・シュゥイ　　※挟み平：押韻しない句の下三字○●●→●○●も可
今上岳陽楼　jīn　shàng　Yuè　yáng　Lóu　　この場合、二四不同でなくてもよい
○●●○◎　チン・シャン・ユエ・ヤン・ロウ
呉楚東南坼　wú　chǔ　dōng　nán　chè
●●○○●　ウー・チュウ・トゥン・ナン・チュゥ
乾坤日夜浮　qián　kūn　rì　yè　fú
○○●●◎　チエン・クン・リー・イエ・フゥ
親朋無一字　qīn　péng　wú　yī　zì
○○○●●　チン・ポン・ウー・イー・ツー
老病有孤舟　lǎo　bìng　yǒu　gū　zhōu
●●●○◎　ラオ・ピン・ヨウ・クー・チョウ
戎馬関山北　róng　mǎ　guān　shān　běi
○●○○●　ロン・マー・クアン・シャン・ペイ
憑軒涕泗流　píng　xuān　tì　sì　liú
○○●●◎　ピン・シュエン・ティー・スー・リウ

資料３

参考資料　『詩経』（『新釈漢文大系』明治書院）

鵲巢

維鵲有巢　維鳩居之　　維れ鵲に巣有り　維れ鳩の居まふ
之子于帰　百両御之　　之の子　于に帰ぐ　百両もて御へん

維鵲有巢　維鳩方之　　維れ鵲に巣有り　維れ鳩の方ぶ
之子于帰　百両将之　　之の子　于に帰ぐ　百両もて将らん

維鵲有巢　維鳩盈之　　維れ鵲に巣有り　維れ鳩の盈つ
之子于帰　百両成之　　之の子　于に帰ぐ　百両もて成さん

【訳】

ああカササギは巣をつくり、ああふふどりがすまう。
この子はこうして嫁いでゆく。百両の車で迎えよう。

ああカササギは巣をつくり、ああふふどりが並ぶ。
この子はこうして嫁いでゆく。百両の車で送り出そう。

ああカササギは巣をつくり、ああふふどりは満ち盛える。
この子はこうして嫁いでゆく。百両の車で（めでたく婚姻が）とげられる。

君子于役

君子于役　不知其期　　君子　役に于く　其の期を知らず
曷至哉　鷄棲于塒　　曷くにか至らんや　鷄は塒に棲り

日之夕矣　羊牛下来　　日の夕べに　羊牛は下り来る
君子于役　如之何弗思　　君子　役に于く　之を如何にして思ふこと弗からん

君子于役　不日不月　　君子　役に于く　日ならず月ならず
曷其有佸　鷄棲于桀　　曷か其れ佸る有らん　鷄は桀に棲り

日之夕矣　羊牛下括　　日の夕べに　羊牛は下り括る
君子于役　苟無飢渇　　君子　役に于く　苟も飢渇すること無かれ

【訳】

あなたはお仕事で出掛けられ、お帰りは何時かはわからない。
どこまで行かれたのでしょう。ニワトリはねぐらに休み、
日が暮れれば、ヒツジがそしてウシが帰ってくる。
なのにあなたはお仕事で出掛けたまま、心配せずにはいられません。
あなたはお仕事で出掛けられ、もう何日、何か月になりましたことやら。
何時になったら会えるのでしょう。ニワトリはねぐらに休み、
日が暮れれば、ヒツジがそしてウシが帰ってくる。
なのにあなたはお仕事で出掛けたまま、どうかひもじい目にはお遭いにならないで。

資料３

碩鼠

碩鼠碩鼠　無食我黍　　碩鼠　碩鼠　我が黍を食ふこと無かれ

三歳貫女　莫我肯顧　　三歳女に貫へども　我を肯へて顧ふこと莫し

逝将去女　適彼楽土　　逝きて将に女を去り　彼の楽土に適かんとす

楽土楽土　爰得我所　　楽土楽土　爰に我が所を得ん

碩鼠碩鼠　無食我麥　　碩鼠　碩鼠　我が麥を食ふこと無かれ

三歳貫女　莫我肯德　　三歳女に貫へども　我を肯へて徳とすること莫し

逝将去女　適彼楽國　　逝きて将に女を去り　彼の楽國に適かんとす

楽國楽國　爰得我直　　楽國楽國　爰に我が直しきを得ん

碩鼠碩鼠　無食我苗　　碩鼠　碩鼠　我が苗を食ふこと無かれ

三歳貫女　莫我肯勞　　三歳女に貫へども　我を肯へて労とする莫し

逝将去女　適彼楽郊　　逝きて将に女を去り　彼の楽郊に適かんとす

楽郊楽郊　誰之永號　　楽郊楽郊　誰か之れ永號せん

【訳】

大きなネズミよ、大きなネズミ、わたしのキビを食い荒らさないでくれ。
長い間お前に勝手気ままにさせたのに、わたしを気にかけてくれようともしない。
お前たちのもとを去り、（よく治まった）楽土へ行こう。
楽土よ楽土、そこここそわたしの落ち着き場所。

大きなネズミよ、大きなネズミ、わたしのムギを食い荒らさないでくれ。
長い間お前に勝手気ままにさせたのに、わたしに恩恵を受けたとも感じていない。
お前たちのもとを去り、（よく治まった）楽国へ行こう。
楽国よ楽国、そここそわたしが正しく生きられる場所。

大きなネズミよ、大きなネズミ、わたしの苗を食い荒らさないでくれ。
長い間お前に勝手気ままにさせたのに、わたしに苦労を忍んで働いたとも思っていない。
お前たちのもとを去り、（よく治まった）楽郊へ行こう。
楽郊よ楽郊、そこは誰一人として嘆きさけぶものはいない。